

第22講 小説(3) — 理由説明

要点整理

論説・評論文と同じく、傍線部の理由説明を求めるものであるが、小説の場合は、登場人物がそのような言動をするに至った理由となる心情・心理を説明させるものである。よって、小説における理由説明問題は心情説明問題の一種型ととらえることができる。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

・傍線部「……」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

傍線部「……」とあるが、がそうしたのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

- ① 傍線部に至る話の展開を正確に把握したうえで、傍線部の内容を検討する。そして特に傍線部の前後に着眼して理由説明のポイントとなる語句を探す。
 - ② 小説における理由説明問題は、心情説明をその本旨としていることから、傍線部の前後に登場人物の心情が読み取れる箇所を求めて、心理上の因果関係を把握する。
 - ③ 論説・評論文と同じく、理由づけはあくまでも本文に求める。「ここにこう書いてあるからこうなのだ」という論証的な態度で臨み、自分勝手な思い込みで解答しないようにする。
- 第21講で確認した心情説明問題の解法のポイントを再度確認する。
- ・導入文から登場人物、場面設定などを把握する。
- ・登場人物の言動などから心情の推移を把握する。
- これらに気をつけて本文を読み進み、登場人物の心情把握をより確かなものにするのが大切である。

読み方

読解のポイント

- (1) 評論・論説文と違い、傍線部の前後に「なぜなら」「というの」などの理由を表す語句があることはまずないから、より慎重にその因果関係を把握する必要がある。
- (2) 選択肢の吟味に際しては、直接的な理由を説明する末尾の部分（「……から。」）にまず着眼して、その適否を判断する。そのうえで、補足的な説明の内容上の適否について検討する。選択肢は直接的な理由説明だけでなく、その補足的な説明も加えてつくられている。
- (3) 選択肢の中には、内容的にはもっともらしくとも、本文にその根拠を見出せないものや、内容的には正しくても傍線部の理由として結びつかないものが含まれているので注意が必要である。

重要語句

演習問題 A

次の文章は、津島佑子の小説「水辺」の末尾である。「私」は夫と別居し、娘との二人暮らしの日々がしばらく続いた。二人の住まいは四階建ての一番上の部屋で、その部屋の中を通らないと屋上に出不来ない構造になっている。ある夜、「私」は壁の向こうに水の音が聞こえるように思ったが、そのまま寝入ってしまった。翌朝、階下の人から水漏れがするという苦情が持ち込まれる。本文はそれに続く部分である。これを読んで、後の設問に答えよ。

すみません、そこは遠慮して下さいませんか。それより、屋上を見てみましょう。けさ、屋上は調べなかったんです。

です。

私はあわてて、二人の男を部屋のなかの階段に導いた。敷き放しの乱れた蒲団など見られたら、と思うだけで、体がこわばった。

風呂場は異常なかった。屋上に出るドアを開け、私が真先に外に出た。眼に異様なものが映った。私は、思わず、声を洩らした。乾ききっているはずの屋上に、水がきらきら光りながら波立っていた。透明な水が豊かに拡がっていた。

——ウミ！ ママ、ウミだよ。わあ、すごいなあ！ おおきいなあ！

娘は裸足のまま、水のなかに跳びこんで行った。一人で笑い声を響かせながら、水を蹴散らし、両手で水をすくいあげたり、顔に水をつけてみたりしはじめた。娘の足だと、水はくるぶしまで呑みこんでしまっていた。

私と二人の男は水の流れを辿りながら、給水塔の前に行った。水が、そこから、勢いよく溢れ出ていた。見とれてしまふほどの、水量だった。

——ここから、あっちの方へ流れて、排水口で間に合わない分が、下に洩れていたんですな。どこかに、小さな罅でも出来ているんでしょう。それにしても……これは大した眺めだ。

三階の男も、気を吞まれてしまったのか、すっかり穏やかな表情に戻っていた。

——まったく、これじゃ、あの程度で下が助かったのを、ありがたく思わなければなりませんなあ。

——ほら、お子さんをすっかり喜ばせてしまった。

——うちの孫も、水が大好きですよ。

二人の男は眼を細めて、水と戯れている娘の姿に見入った。

しかし、あなた、真下にいて、音ぐらいは聞こえていたでしょうに。

不動産屋に言われ、私ははじめて、ゆうべの水の音を思い出した。あの柔かな、遠い音。この現実の身にもう一度、蘇える音だったのか、と私は不意を襲われたような心地がして、肌寒くなった。

——そういえば、聞こえていたんですけれど……起きてみたら、空が晴れあがっていたものですから……そのまま、なんとなく……。

——なんだ、その時にちゃんと調べていてくれれば、修理もすぐにしてもらえたのに。

三階の男が言った。私はしどろもどろに頭を下げて、あやまった。

翌朝早く、給水塔は修理させるから、ということと、二人の男は引き払って行った。

その夜、私も裸足になって、娘とたつぷり屋上の「海」を楽しんだ。なにも危険はないはずなのに、水の拡がりに身を置くことには不安がつきまとい、その不安が心を弾ませた。水を掛け合ったり、鬼ごっこをしているうちに、私も娘もびしょ濡れになってしまった。濡れると、さすがに、寒さを感じた。日中、いくら暖かくなったとは言え、まだ五月のはじめだった。

部屋に戻ると、それまでずっと鳴り続けていたのだろうか、電話がちやうど鳴り終わったところだった。藤野の顔が思い浮かんだ。その顔に重なり、藤野と暮らせるようになった時の自分の喜び、そして、大喜びで婚姻の届けを区役所

◇体がこわばる＝緊張や恐怖などで体が固くなる。

◇くるぶし＝足首の、左右に骨が盛り上がっている部分。

◇不意を襲われる＝思いがけない目にあふ。「不意をつかれる」などともいう。

◇しどろもどろ＝話し方などが、筋が通らずひどく乱れ、あちこちにつかえるさま。

④

に出しに行った自分、藤野と子どもをためらいなく産んだ自分に、私はこれからずっと責任を取らなければならないのでしょいか、と小林に問いかける自分の声が聞こえた。小林は頷いてるように思えた。同時に、数えきれないほどの人影がまわりに現れ、さかんに頷きはじめた。

「かたまり」の説明

娘の父親であり、私の夫である男だが、私はすでに一カ月以上、その男の知らない、知らせようもない、とりたてて大きな事件は起こらなかったが、その平穏なことに、かえって、これからの日々への怖れを膨らませずにいられないような生活を続けてきてしまっている。安定を保てるはずがないのに、一向に倒れず、それどころか、そのまま根を張り、新しい芽さえ覗かせようとする、歪んだ、これれやすい、透明なひとつのかたまりを眼の前にはしているような心地だった。それが見えるのは、私の二つの眼だけなのだ。藤野と再び、夫婦として、なにげなく顔を合わせるには、私はあま

りにも、この新しく自分に手渡された不安定なかたまりに愛着を持ちはじめていた。夫として私に立ち向かう藤野の口調は、私に、最早、異和感しか与えなかった。その遠い、意味もよく分からなくなってしまう声に、それでも私は、藤野の方から切り捨ててくれない限り、耳を傾け続けなければならないのだろうか。

別居を決めたのは藤野の方だったのに、それでも私は藤野を忘れてはいけなかったのですか。私はもう一度、まわりの人影を眺めた。それぞれ私に知っている人に似ているような人影は、一様に深々と頷いた。

その夜も、水の音は私の耳もとに響いていた。私は柔かく湿った感触に包まれて眠った。

翌朝、呆気なく、給水塔の修理は終わってしまった。屋上はみるみるうちに、透明な水を失っていった。娘が私の代わりに、修理工を詰めてくれた。

——おみずを、とめちゃだめ。けちんぼ！ だいきらい！

二日後の日曜日には、一日がかりで、屋上が補修された。夕方、作業が終わったというので、屋上を覗きに行った。完全に乾くまで、立ち入らないように、と注意されていたので、その注意を娘に何度も言い聞かせながら、屋上への階段を登った。

ドアを開けて、先に屋上を見た娘が、海を見つけたときよりも更に高い金切り声を上げて、騒ぎはじめた。

なにごとよ、と眩しながら、私も屋上を覗いた。そして、自分の眼を疑った。鮮やかな銀色に一面、照り輝いていた。眩ゆさに、眼の奥が痛んだ。罅のいった部分を埋める程度の補修かと思っていたのに、防水用のペンキを屋上の隅から隅までたっぷり塗っていったのだった。春ですらこの眩ゆさでは、夏になれば、覗き見ることもできなくなってしまうのに違いない。この街のなかで、眼を焼いてしまう、雪原を歩く人のように、海を漂う人のように。

銀色の海。

私は笑いださずにはいられなかった。これもまた、素晴らしい眺めではないか。しかも、今度は誰にもこの海を持ち去ることはできない。

きれいだねえ、おほしさまみたいだねえ、と娘は銀色の屋上に見とれていた。

藤野から電話が掛かってきたのは、その次の日の夜だった。私には、ますます藤野の気持ちをこじらせるような対応しかできなかった。藤野の声を聞いたときにどうして足が震えるのか、分からなかった。

同じ夜、私は自分が銀色の星の形をした器のなかに坐っている夢を見た。器は少しずつ回転を速め、気がつくや遠心力で、私の体は平たくなり、壁に貼り付いていた。許して下さい、と叫ぶと、中学生の頃の同級生が私の星を見上げて言った。

（あなたは、どうして、そう、だめなの）

同級生と言っても、親しく口をきいたこともない、ずば抜けた成績の持ち主だった。いつも級長に選ばれていたのはともかく、容姿も整っていたので、男友だちも多かった。それにしても、あの人を今頃、夢に見るとはそのこと自体、馬鹿げている、と思いつながら、そんなことを言われたって、だめなものだめなもの、と涙を流しながら弁解をしていた。それに、これでも見捨てずにいてくれる人だっているわ。本当よ。きつと、いるわ。

悲しげに首を横に振り、立ち去って行った同級生は、昔のままの美しい少女だった。

（注）小林：「私」の勤務先の上司。結婚のいきさつを知っている。

異和感：違和感のこと。作者の表記に従っている。

問一——線a～cの表現の本文中における意味内容として最も適当なものを次の各群のA～Cから一つずつ選び、記号で答えよ。

a	声を洩らした	ア	ひとりごとを言った
	ウ	イ	こっそりとつぶやいた
	エ	ウ	悲鳴を上げた
	オ	エ	感情的に言った
b	気を吞まれて	ア	圧倒されて
	ウ	イ	驚きあきれて
	エ	ウ	無我夢中で
	オ	エ	引き込まれて
c	自分の眼を疑った	ア	不思議に思った
	ウ	イ	信じられなかった
	エ	ウ	不安を感じた
	オ	エ	意外に思った

◇呆気ない＝期待・予期に反して、あまりに簡単・貧弱でものたりない。

◇詰る＝（相手の悪い点を）問いただして責める。「詰」の音は「キツ」「詰問」など。

◇金切り声＝金属を切るときに出る音のような、鋭く甲高い声。きいきい声。

◇こじらせる＝物事をもつれさせる。解決を難しくさせる。

△語義を問う設問。傍線部の前後に着目し、文脈から判断することも重要。

a 直前に「思わず」とある。

b 直後に「穏やかな表情に戻っていた」とある。

c 意外な展開に驚く様子をいう。

◇無我夢中＝我を忘れ、あることに熱中すること。「無我無中」と書くのは誤り。

・傍線部の内容
→「ゆらゆら」の水の音について
・傍線部の心理描写と説明

問二 線①「この現実の身にもう一度、蘇える音だったのか、と私は不意を襲われたような心地がして、肌寒くなった」とあるが、なぜ「私」は、肌寒くなったのか。その理由として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 水の音がするのに放置していたことで、場合によると大きな事故になりかねないと不安になったから。
イ 水漏れに対する判断を間違えたことから、自分の責任が問われるのではないかと気がかりになったから。
ウ 現実と非現実を混同してしまうような自分は、精神的に不安定ではないのかと心配になったから。
エ 夢うつつで安らぎを感じていたものが、実際には危険をもたらす可能性があったのだと恐ろしくなったから。
オ 世の中ではいつ何がおこるか分からないという体験をして、人間の生活の不気味さを知ったから。

「エ」

・2つの「私」の説明
・傍線部中心の心理描写と説明

問三 線②「私はあまりにも、この新しく自分に手渡された不安定なかたまりに愛着を持ちはじめていた」とあるが、なぜ「手渡された」「かたまり」という表現が用いられているのか。その理由として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分から望んだ状況ではないものの、「私」が娘を育てる責任を受け止めようと決意していることを表すため。
イ 別居という事態が自分の意思とは関係なく機械的に進行したこと、「私」がこだわっていることを表すため。
ウ 娘との二人暮らしという意にそわな生活に余儀なくされて、「私」がとまどっていることを表すため。
エ 夫との別居によってもたらされた状況が、「私」に重くのしかかっていることを表すため。
オ 先が見えない「一人だけの生活」を強いられ、が「私」がそこに何らかの充実感も覚えていることを表すため。

「オ」

新しい生活に対する「私」の心情と
「私」の水遊びの場面から「私」の心情を
「私」の水遊びの場面から「私」の心情を

問四 線③「娘が私の代わりに、修理工を詰ってくれた」とあるが、この表現からうかがわれる「私」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 二人だけの生活に慣れはじめて、娘が自分の気持ちを察してくれるようになった。水が与えてくれる安息を大切にしたいという自分の思いを代弁してくれたことに對して、うれしく思っている。
イ 大人である自分は子供のために「海」を残したいと思っているが、口に出して言えない。しかし、無邪気な子供は好きなことが言えるものだなど痛快に思っている。
ウ 娘との生活は不安の中に心を弾ませるものがあった。屋上での水遊びはその象徴のようであり、娘がそれを直感的に受け止め自分の気持ちをうまく言ってくれたと思っている。
エ 娘との二人きりの生活を守っていききたいのだが、周りからの干渉を防ぎきれずにいる。水漏れの件もその一例なのだが、娘がそれに一人で立ち向かってくれたので、いじらしく思っている。
オ 遠慮を知らない娘の乱暴な言葉づかいに困惑した。しかし、その乱暴さがかえって、自分の水への愛着の率直な表明になっていることに気づき、うれしく思っている。

「ウ」

「私」の思いと
想像の中の人々と応対と把握する

問五 線④～⑥における「私」の想像や夢の中に現れる「人影」や「同級生」の様子を、線⑦はどのように受けていると考えられるか。最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 周囲の人々は私の苦境を理解してくれていて、それが心のささえになっている。同級生の言動は、他人に頼りがちな私のあり方が肯定できるものではないことを客観的な態度で教えてくれている。
イ 周囲の人々は藤野への慎重な応対を促すが、素直には従いたくない。同級生の言動には、当面の問題から逃避しがちで事態を開きできない私の態度に落胆し、昔と変わらないと非難する気持ちが表れている。
ウ 周囲の人々は愛情に責任を持てない、また藤野の気持ちも考えられない。私はそれに従うべきかどうか悩んでいるが、同級生の言動は、不安定なまま決断できない私を愚かだと決めつけている。
エ 周囲の人々は結婚生活に傷ついた私に今後のことを心配して忠告してくれる。同級生は親しくなかったが、他人に甘えるような私の態度では事態は解決しないと親身になって叱ってくれている。
オ 周囲の人々は藤野のいうことを聞くようにと迫ってくるが、私はどうしても恐ろしさが先に立ってうまく応対ができない。同級生はそんな私の意志の弱さをひややかに批判している。

「イ」

設問文と確認し、
本文中の「水」についての
描写に注意しない

問六 この文章における「水」についての説明として適当でないものを次のア～キから二つ選び、記号で答えよ。

ア 水は「私」を危険に陥れることがあると同時に、無邪気にさせたり心を弾ませたりもする二面性を持っている。
イ 水は「私」に現実的な不安と心の安らぎとを与えており、それは「私」の心の振幅の大きさを示している。
ウ 水はひとときのあいだだけ「海」を出現させることによって、「私」に現実のはかなさを思い起こさせる。
エ 水が豊かに広がる様は、日々の生活で気が晴れない思いをすることもある「私」の心を明るく解放する。
オ 水の透明性は心を洗うような働きをすることにも、「私」の不安定な現状を暗示している。
カ 水の印象が「私」の心に鮮やかに残り、ペンキが塗られた屋上まで「海」と感じさせるようになっていく。
キ 鱗にしみ込む水の存在は、藤野夫婦のあいだに心の亀裂が生じていたことを比喩的に表現している。

「ウ」「キ」

△理由説明を求める設問。「この現実の身にもう一度、蘇える音」とは水の音のことを言っている。

◇夢うつつ①意識がぼんやりし、夢か現実かはつきりしないこと。②夢と現実。

△このような表現を用いた理由説明を求める設問。「手渡された」「かたまり」という特別な表現に込めた作者の意図を説明する。これらの表現の具体的な内容を、傍線部の前後の内容から把握する。傍線部の「愛着」にも着目。

△心情説明を求める設問。「詰る」の意味をおさえたうえで、屋上の水が「私」と娘にとつてどのような意味があったのかを理解する。

◇痛快＝胸がすくほど非常に愉快なこと、気持ちのいいこと。

◇いじらしい＝子どもなどのか弱いものが一生懸命努力している様子が、痛々

しくかわいそうで、胸が熱くなる感じだ。

△内容説明を求める設問。「私」が藤野との関係について自問すると、それに対して「人影」が反応する。両者それぞれ思いを読み取る。また「同級生」については特に立ち去るときの子に着眼すると、その心情を正確に把握することができる。

△「水」の象徴的な働きを問う設問。「水」について描写した箇所をすべて確認し、それに対して「私」が抱く印象・心情を把握する。また屋上に広がる水と「私」の新生活との関連を読み取る。